



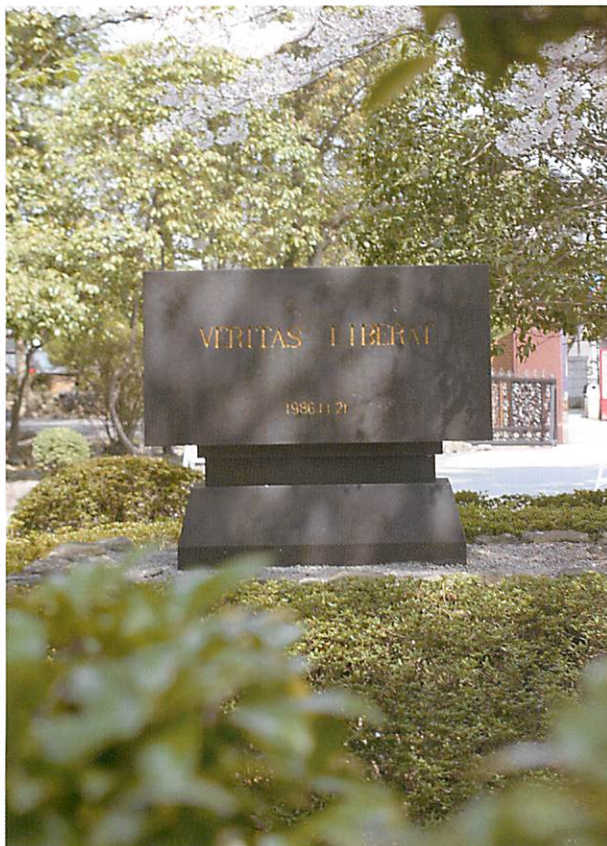
ARGONAUTES

別府大学図書館報

アルゴノートNo.49

CONTENTS

- 本を読むことの意味をあらためて考える 江崎 一子
- 北アイルランド小説が教えてくれた
「ユーモア」と「やさしさ」…………… 八幡 雅彦
- 日本の地熱開発、ルーツは別府
—「地熱発電ノ研究」にみる情熱と功績— …… 阿部 博光
- トニー・ジャット『ヨーロッパ戦後史』を読んで 佐藤 瑠威
- わが著書を語る…………… 飯沼 賢司



本を読むことの意味をあらためて考える

江崎 一子

2014年に放映されたNHK朝の連続テレビ小説「花子とアン」の中には、本に関する忘れられない名シーンが数多く登場した。もちろん、主人公の村岡花子（幼少時の名は安東はな）はモンゴメリーの「赤毛のアン」を初めて日本語に翻訳した女性であり、その花子の幼少期から成人したのち翻訳家として大成するまでの半生がドラマの主題であったことから当然と言えば当然である。幼少期のはなに、家族と離れて行商を生業としている父親が都会で買い求めた絵本をお土産に持ち帰った時のシーンがその一つだ。その当時の日本の田舎では、本のある家庭などめずらしかった。テレビ画面は、はなが生まれて初めて本に出会った時の感動を、子役の山田望叶が何とも例えようのない驚きの表情と父親に対する尊敬のまなざしに満ちた名演技で伝えていた。その後、本が大好きになったはなは、近くの教会にたくさんの本があることを友達に教えられ、教会に足しげく通っては、片端から本を読むことに没頭するようになる。はながこの読書体験で培った文章の読解力は、語彙を巧みに使いこなし、創造力、連想力など、のちに、日本語に翻訳する上で欠かすことのできない豊かな文章表現を醸しだすのに大きな役割を果たしたことは間違いない。

何も翻訳家を目指さなくとも、人は自在に語彙を操り豊かに文章表現ができるほうが、できないより、様々な仕事をする上で、たとえ、日常生活のなかの何かをこなすことであっても、いろい

ろな力となって助けてくれるに違いない。読書により文章力を磨くことは、私たちにとって、そのまま、豊かな生活力につながるのではないだろうか。

現在のドイツの家庭でどうなのか定かではないが、15年ほど前にベルリンで若いドイツ人夫妻の家に招かれ夕食をごちそうになった時のこと、夜8時に若い母親は「ご本の時間がきた」といって客の私に詫言、3歳になった娘と一緒に寝室に消えた。夜寝る前には、毎日欠かさず、子供に本の読み聞かせをするのを習慣にしているのだといい、自分たちも子供の頃そうやって育ったからと付け加えた言葉が今もはっきりと思い出される。また、もっと前ではあるが、やはり、別のドイツ人夫妻の家に招待されたとき、その1週間後にモーツァルトのオペラ「魔笛」を家族で観に行くことになっているので、毎日オペラのあらすじが書かれた本を、2人の小学生の子供たちに読んで聞かせているのだと説明を受け、かなりの衝撃を受けたことを覚えている。私自身、その当時、小学生の子たちよりかなり幼くはあったものすので子供がいたので、子育てや教育のやりかたについて深く考えさせられた。

ここ5年ぐらい、1年に1度ではあるのだが、久住の山中にぽつんと鎮座したロッジ風ホテルで家族と2泊3日のゆっくりした時間を過ごす機会に恵まれた。そこは、テレビをつけなければ、風の音と虫や鳥の声のほかは、音という音がほとんどきこえてこない場所である。そのホテルの食堂の横にオープン式のほんとうに小さな図書室がある。大抵、いつも誰かがそこで本を読んでいるのだが、そこに置いてある本や新聞は宿泊室に持ち込んで読むのも自由で、3人の孫たちは思い思いの本を選んで部屋まで運んでいく。本棚には、読んでみたい知らない本が多く並んでいるが、私自身が20代の頃にくり返し読んだ『古寺巡礼』や、長女が小学生の頃に大好きだった『はてしない物語』『モモ』も並んでおり、懐かしい過去の記憶



まで甦らせてくれる。まだ読んだことのない本は、もしかすると、それまで全く知らなかった、でも知るととてつもなく面白い世界へと誘ってくれるかも知れない。図書室とは今必要な情報を与えてくれるだけでなく、人を過去にも未来にも時空を超えて誘ってくれる大きな可能性を秘めた場所なのである。

ただし、図書室や本にそのような可能性を期待するのなら、常日ごろから読書に親しんでおかなければならないのはいうまでもないだろう。そのためにも、あるいは先に述べたより豊かな生活力を育むためにも、正しいものも誤ったものも複雑に入り交じった様々な情報の氾濫する今だからこそ、幼い頃から読書の習慣を身につけさせることの重要性について再認識することを皆で真剣に考える必要があるのではないだろうか。

今の日本であれば、幼い頃から本に親しむ環境を整えることはさほど困難なこととは思わない。しかし、世の中の動きはIT革命ということばが使われはじめたころから、本を読むどころの話ではなく、活字離れに拍車がかかったようである。本の年間の出版数や売上数にいたっては、軒並み

減少傾向が続いており、勢いは止まるところを知らない。

最近、新しいタイプの図書館を持つ大学やそれまでにない機能を備えた本屋が出現し話題となっている。いずれも居心地の良い空間を提供することで長時間滞在したくなるような工夫が施されているところが共通している。知的活動を行う場をより良い環境に整え利用者の活動を支援することがねらいであるが、とりもなおさず利用者の増加につながる。入ってみたい図書館、いつまでもいたい図書館が、子供や若者たちの身近な場所にふえることを期待したい。

(別府大学食物栄養科学部 教授)



北アイルランド小説が教えてくれた 「ユーモア」と「やさしさ」

八 幡 雅 彦

私が初めてアイルランドを訪れたのは1988年3月のことだった。“Irish Hospitality”という言葉が存在するように、私はアイルランドの人々の親切に心打たれ、この国をもっと深く知りたと思った。しかし当時「北アイルランド紛争」が続いており、私は、こんなに親切なアイルランドの人々がどうして憎しみ合い戦っているのか疑問を感じた。そしてイギリス小説が専門であった私は、この紛争を北アイルランドの小説家たちはどのように描き、どのような解決策を示唆しているのか研究しようと決意した。

北アイルランド紛争とは、イギリスに祖先をも

ち、北アイルランドのイギリス残留を主張するユニオニスト（おもにプロテスタント教徒）と、アイルランドに祖先をもち、北アイルランドのイギリスからの独立、アイルランドの統一を要求するナショナリスト（おもにカトリック教徒）の間で続く紛争で、その起源は400年以上前に遡る。

私がこの紛争を描いた小説を読んでいくうちに出会ったのがジョージ・A・バーミンガム（1865 - 1950）だった。北アイルランドの社会芸文批評誌『フォートナイト』の1992年5月号が、今日ではあまり読まれることがないがもっと多くの注目に値する小説家たちを取り上げた。そのうち

の一人がバーミンガムで、「紛争をユーモアで描いた」と紹介されていた。「えっ、紛争をユーモアで描くなんていうことがありえるのか？」と驚いた私は俄然この小説家に興味がわき、彼の小説をアイルランドの古書店から購入し片っ端から読み始めた。

バーミンガムの本名はジェイムズ・オウエン・ハネイで、北アイルランドの首都ベルファストのプロテスタント・ユニオニストの家庭に生まれた。しかし彼はナショナリズムに共鳴しアイルランドの統一を訴え、初期の小説ではアイルランドのイギリスからの独立を目指して戦う若者たちを描いた。ところがアイルランドのありのままの姿を描いたこれらの作品にはカトリック・ナショナリストに対する批判も見られ、バーミンガムはユニオニスト、ナショナリスト双方から非難、糾弾されることとなった。この苦難の体験から生まれた彼の信念は「仕事は決してまじめに考えすぎてはいけない。仕事は常にコミカルなもので、ジョークとして扱うべきだ」（1934年出版の自叙伝『麗しき土地』のうちの一節）ということであった。すなわち世の中のすべての事象の内にはユーモアのネタがある、ジョークの精神を持って何事にも取り組んでこそ対立は避けられるということで、ユーモアの普遍的意義を説いた。

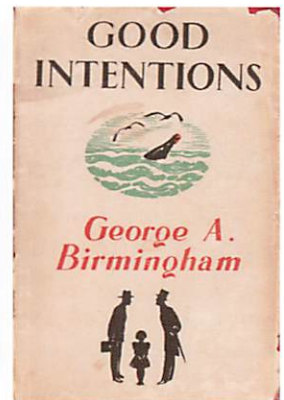
1913年出版の『ジョン・リーガン将軍』はバーミンガムのユーモアの精神を代表する作品である。アイルランド西部の田舎町に大富豪のアメリカ人が訪れた。彼は、この町に生まれ南米ボリビアの独立のために戦ったジョン・リーガン将軍の伝記を書きたいので町の人々の協力を仰ぎたいという。しかし町の人々は誰ひとりとして将軍のことを知らない。そこで主人公のオグラディ医師が町のユニオニストとナショナリストの住民を一致団結させ、将軍を知っているふりを決め込んでこのアメリカ人を騙し、巨額の寄付金をせしめようと企む。最後に将軍の正体がばれ金は水泡に帰す寸前となるが、このアメリカ人は人々を一致団結させ自分を騙そうとしたオグラディ医師のエネルギーに感服し、約束通り町に巨額の寄付金を残して去る。このようにバーミンガムの小説の主人公たちはユーモアとジョークの精神をフルに発揮しユニオニストとナショナリストの対立をまるく収

める。

バーミンガムは小説家であると同時に深い信仰心を持ったキリスト教聖職者であった。亡くなる年の1950年まで約60年間を教会で過ごし人間愛とやさしさに満ちた講話を行い、また『キリスト教修道制度の精神と起源』（1903）、『私はキリスト教徒たりえるか?』（1923）、『イザヤ』（1937）等の神学書を著し人々に勇気を与え続けた。このバーミンガムの人間愛とやさしさとユーモアが有効に結びついているのが彼の小説の主人公たちである。『ジョン・リーガン将軍』のオグラディ医師、『スペインの黄金』（1908）のJ.J.メルドン、『善意』（1945）のヴァン・レナン等は、対立する人々の和解と融和のためにユーモアとジョークの精神をいかんなく発揮して八面六臂の大活躍をする。



ジョージ・A・バーミンガム



『善意』

バーミンガムは言う。「私自身の経験から言えば、本当の絶望を避ける唯一の望みは、物事のコミカルな面を見ようという断固たる決意です」有意義な人生を送るためには常にユーモアの精神を持ち続けることが不可欠であるとバーミンガムは私に教えてくれた。私が作成したバーミンガムのホームページ (<http://geo-birmin.com>) で「発車オーライ」（1921）を始めとする5つの短篇小説を翻訳公開しているので関心のある方はお読みになって下さい。

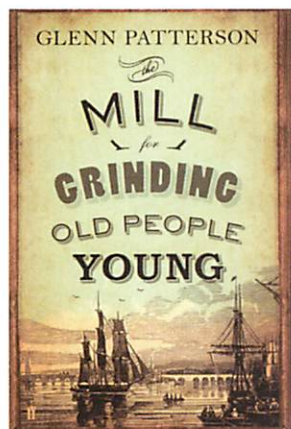
もうひとり紹介したい北アイルランドの小説家にグレン・パタソン（1961 - ）がいる。『わが身を燃やす』（1988）、『過去の出来事』（2004）等で北アイルランド紛争の悲惨さを描くと同時に、『ホテル・インターナショナル』（1999）、『ナンバー5』（2003）、『老人をすり潰して若者に変

身させる製粉所』(2012)、『後は従うだけ』(2014)等では北アイルランドの人々に対してやさしいまなざしを向けている。

『老人をすり潰して若者に変身させる製粉所』は、19世紀のベルファストを舞台に主人公ギルバート・ライスとポーランド人女性マライアの、はかないが、永久(とわ)に続く恋を描いた。当時、ポーランドはロシアから独立を目指して戦っ



グレン・パタソン



『老人をすり潰して
若者に変身させる製粉所』

ていた。一方、アイルランドはイギリスからの独立戦争「1798年蜂起」に敗北を喫したばかりだった。アイルランドに共感するマライアは、この独立戦争の拠点だったベルファストにポーランドから亡命して来て酒場で働いていた。ギルバートはマライアとの出会いを通してベルファストの社会改革に燃え、凶器に手を出す、間一髪で彼の運命は大きく変わる。マライアとの悲しい別れが訪れる。ギルバートはマライアへの想いを一生胸に秘め、船舶事業を起しベルファストの発展に貢献する。

長年の紛争に苦しんできた北アイルランドだが、1998年のベルファスト和平合意を機に平和へと向かいつつある。紛争を必死に克服し続けてきた北アイルランドの人々はひとときわやさしく、そのユーモアは輝きを放つ。そのようなユーモアとやさしさを兼ね備えた北アイルランド小説の魅力を今後とも私はできるだけ多くの人々に伝え続けてゆきたい。

(別府大学短期大学部 地域総合科学科教授)

日本の地熱開発、ルーツは別府 — 「地熱発電ノ研究」にみる情熱と功績 —

阿部 博光

鉄輪に潜む日本初の地熱発電所跡

別府市の鉄輪地区。高熱の温泉や蒸気が多く自噴するこの地で1925年(大正14年)11月13日、日本で最初の地熱発電が稼働した。日本初の電力会社である東京電灯の研究所長、太刀川平治氏(工学博士)が、別府市出身で新聞記者や大蔵省の役人などを経て帰郷していた高橋廉一氏とともに研究成果を実らせたのだった。世界ではイタリア、米国に次ぐ3番目。まさに快挙といえる。

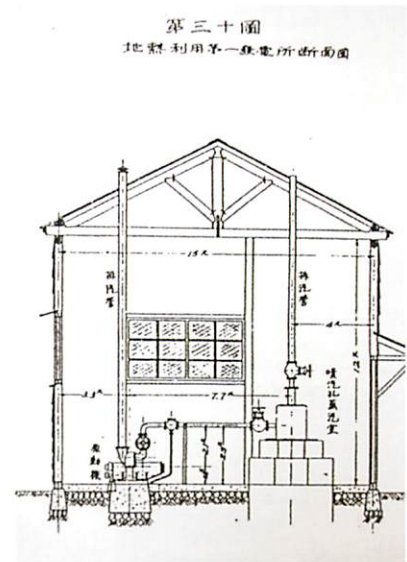
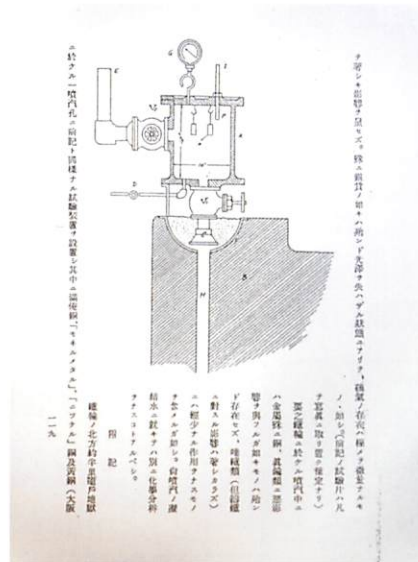
地熱発電の施設を建造するまでの経緯、当時の発電の様子などは1930年に出版された太刀川氏の著書「地熱発電ノ研究」(日本動力協会)に記載されている。当時の開発で苦労した点、多くの地熱研究者がそれぞれの専門分野で知恵を出し合っ

たことなども詳細に綴られている。地下深くの地熱を利用すれば大爆発が起きると恐れられていた時代でもあり、太刀川氏らが鉄輪を舞台に行った地熱エネルギーとの奮闘ぶりは郷土史の貴重な記録としても注目できる。

太刀川氏は著書の中で、原動機に多少の不具合が生じながらも直流1.2kWの発電で電灯を灯すことができた瞬間を、このように振り返っている。

「之レ発電力トシテハ僅ニ微々タルモノナルモ、吾邦ニ於ケル地熱利用発電ヲ實現シタル最初ノ日トシテ大ニ記念スベキモノナリ」(原文のまま)。

当時はこの発電によって電灯がわずか10個灯っただけだったというが、太刀川氏らにとっては日本の地熱発電史の「明るい前途」を示すのに



十分なものだったと想像できる。

このほか著書の中では、当時の地熱発電施設の断面図を掲載するとともに発電所が原動機と発電室の二部屋に板で仕切られていたこと、排気の方法、タービンやバルブの具合、その他機器の構造、稼働の様子などについて詳細に綴り、「満足な成績を残した」と評価を下している。

ところで建設コストはどれくらいだったのか。太刀川氏は、借地権、機材、運搬、取り付け、人件費などを含めて合計で約8,342円だったと記録に残している。大正末期は、公務員の初任給が約75円の時代。これを基準に換算すれば、現在の水準では1800万-2000万円程度となる。「満足な成績を残した」歴史的な地熱発電所だが、そのコストが高いか安いかにについては、人それぞれの価値観によって大きく左右されるだろう。しかしこの成功が刺激になって世界第3位の地熱資源大国であるこの国の地熱開発が大きく動き出したという事実を考えれば、太刀川氏らの功績は評価に値するのではないだろうか。太刀川氏自身、「小容量の発電所の建設費・実験費としては巨額な支出だった」としながらも、「貴重な実験を行うことができたことを考慮すれば、必ずしも高い買い物ではなかった」と述べている。

「発祥の地」は文化的価値も

また太刀川氏は蒸気噴出成功の段階で「雷公も、車や舟を、押す世なり、地獄の鬼も、出てはたらけ」と「狂歌」を詠み、それを著書で触れている。「船

や車も電気によって操縦されつつある世の中であるのだから、地獄の鬼も出てきて働かなければならない（天然蒸気を噴出させて電源として利用すべきだ）」と説明を付けているが、そのひょうきんな表現は、まさにこれから新たな時代がやってくる地熱発電開発に胸を躍らせていることを示すものだろう。

「日本の地熱発電発祥の地」は、別府市・鉄輪地区西部にある天然坊主地獄の脇の雑木林の中にある。太刀川氏は「地熱発電ノ研究」で、発電用噴気孔を掘削している場所のすぐ近くにある天然坊主地獄があり、これが（1498年の日向灘地震による）「天地鳴動」によって誕生したことや、そこに住んでいた強欲・色欲な寺の住職がその地震で「熱湯の池」ができたことによって無残な死を遂げ、それが坊主地獄の由来になったことなどに触れている。「発祥の地」がほぼ特定できたのは、このようなくだりが記されていたのに加え、地図に描かれた地熱発電所のそばに坊主地獄の名が記されていたことが大きく貢献したとみられる。

しかし残念なことに、「発祥の地」が雑木林内のどこにあるのかについては、いまだ明確でない。最近まで林の中にある石積みの小さな建造物が噴気孔の跡だとみられていたが、著書に掲載された噴気孔の当時の写真とは形状が異なっているなど、決め手に欠けている。またその近くに噴気孔の可能性のある場所が見つかったこともあり、詳細な場所の特定には至っていない。さらに残念なことは、日本で初めて、世界では3番目に地熱発

電所が建設された場所であるにもかかわらず、現在、それを知る者がほとんどいないということである。今後は「地熱発電ノ研究」をもとに、地域を挙げて文化的価値、観光的価値を認識し、「発祥の地」を地域の財産として盛り上げていく必要があるだろう。



(別府大学国際経営学部 教授)

トニー・ジャット『ヨーロッパ戦後史』を読んで

佐藤 瑠 威

トニー・ジャットの『ヨーロッパ戦後史』（森本醇・浅沼澄訳 上・下 みすず書房 2008年）は近年読んだ本の中では圧倒的な印象、感銘を与えてくれたものであった。この本は、第二次世界大戦と社会主義体制の崩壊という20世紀のみならず人類の歴史全体においても特筆すべき二つの重大な出来事の間を、その出来事を中心舞台であったヨーロッパのほとんどの国々の政治、経済、社会、文化等々を視野に入れて考察した壮大なスケールの書である。

ヘーゲルとマルクス以後、歴史はある方向、目的に向かっての進歩、発展の過程であるとする考えが広がり、特にマルクス主義は唯物史観という科学的であると自称する歴史観によって資本主義から社会主義への変化を避けがたく進む歴史法則であるかのような見方を広げた。それゆえ社会主義体制の崩壊は、ただ一つの体制が崩壊したという問題に止まらず、歴史の見方の変更を迫り、現

代をいかなる時代として考えるべきかという根本的な疑問を現代人に突きつけることになった。ジャットはまさにこの根本的な問いから出発して、驚嘆すべき広大で詳細にわたる知識と鋭利な思考力でヨーロッパの戦後史を全体的にとらえようとした。

上下合わせて1000ページ以上に及ぶこの本を読むとき、読者は一ページ毎に、新たな、そしてしばしば驚くべき事実を教えられ、そしてその事実の意味について真剣に、深く考えるように促される気がしてくる。学問的な読書を通して得られる最上のものは、考えるべき重要な問題を発見させ、正確厳密な知識を与え、深く考えさせることにあるが、ジャットのこの本にはそのすべてがあり、そのうえ読み物としても波瀾万丈の物語のごとくおもしろい。ぜひともできるだけ多くの人に読んでほしい本である。

(附属図書館長)

わが著書を語る

『大航海時代の日本と金属交易』の出版の背景

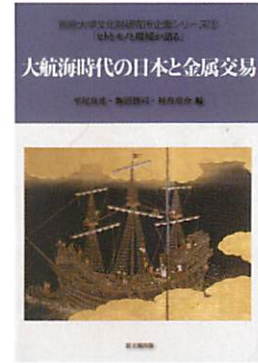
思文閣出版

2014年10月10日発行

定価 3,500円 212頁

文学部史学・文化財学科教授

飯沼賢司



2014年10月、別府大学文化財研究所企画シリーズの第三弾となる『大航海時代の日本と金属交易』が出版されました。このシリーズは2007年に文化財研究所が10周年を迎え、この間に蓄積した研究所関係の研究成果を公開するために、思文閣出版の協力を得て企画されたものです。その最初の成果が2008年の『経筒が語る中世の世界』です。翌2009年には第二弾の『キリシタン大名の考古学』が相次いで出され、シリーズは順調な滑り出しを始めました。しかし、しばらく出版期間が空いて漸く待望の本企画が出版されました。シリーズ③は、2013年3月にまとめた報告書『鉛同位体比法を用いた東アジア世界における金属の流通に関する歴史的研究』（科学研究費補助金 新学術領域研究 研究代表平尾良光）を基に企画したもので、①、②のシリーズの集大成と位置づけられます。

この三冊の本は、分析科学者平尾良光氏による鉛同位体比法という鉛産地の推定法をベースに歴史学の新地平をめざしたもので、私と平尾氏の出会いと多くの領域を越えた研究者のコラボレーションによって生まれました。皆さんは、鉛同位体比法を知っていますか。元素には重さの異なる同位体があり、鉛には4つ異なる質量をもつ同位体があります。この比を使い鉛の産地を推定し、鉛の含まれた銅などの産地を推定したのが鉛同位体比法という分析法です。

平尾氏が東京文化財研究所を退官し、別府大学に赴任したのは2003年のことです。翌年、質量分析計という原子の質量を計る最先端の機器が本学で稼働し始めたころ、私は、平尾氏から唐突な質問を受けました。「質量分析計で銅製経筒に含まれる鉛を同位体比法分析すると、1150年ころを境に日本産の銅が消え、中国産の銅に変わるのでね。日宋貿易のためでしょうかね」というものでした。この突然の質問に私は答えることができませんでした。日本にある12世紀後半から13世紀の銅器が中国産の銅で占められているとはどういうことであろうか。いわゆる日本史上の常識では、室町時代に中国に多くの銅を輸出しており、日本は銅の産出・輸出国であって、銅の輸入ではないからです。

この常識破りの質問が私と平尾氏との文理融合の研究の出発となりました。2008年のシリーズ①の私の主要研究課題は、平尾氏に与えられた非常識な課題に答えるため、日本の貨幣となった宋銭は銅器の材料であったということを文献史料から証明しようとしたものでした。この宋銭の問題に端を発し、平尾氏と頻りに東アジア世界の金属交易の問題を話すようになり、当時発掘が進んでいた府内大友遺跡（大分市）で出土する鉛製品に話が

及ぶようになりました。それによると、この遺跡から出土するメダイには鉛を多量に含むもの、鉛製というべき製品が多数出土し、鉛のインゴットとみられる遺物も発見されました。これらの多くから、日本産でも、中国産でも、朝鮮半島産でもない特異な同位体比を示すものが確認されました。その領域はある場所に集中しているため、N領域の鉛という名称が付けられましたが、当初、どこの地域、どこの鉱山の鉛かはまったくわかりませんでした。ただ、戦国時代の府内大友遺跡の遺物であるため、南蛮貿易との関係が想定されました。

その後、平尾氏は東南アジアのカンボジア、タイの遺跡の青銅製品、鉛などを調査する機会があり、ここからN領域の鉛をいくつも発見し、東南アジア産の可能性が強くなりました。また、この時期に平尾研究室に持ち込まれた国内の発掘遺物、特に鉄砲の玉などからもN領域の鉛が確認されるようになりました。それを踏まえ、2009年のシリーズ②は、府内大友遺跡の調査成果を中心に「キリシタン大名の考古学」をテーマにしました。この本の中で平尾氏と私はN領域を媒介に共同で一つの論文「大航海時代における東アジア世界と日本の鉛流通の意義—鉛同位対比をもちいた分析科学と歴史学のコラボレーション—」を書き上げ「分析歴史学」という新研究領域を提案しました。

この成果を基に申請したのが前述の科学研究費研究でした。この研究では、東南アジアを中心にN領域の解明が行われ、その鉱山をタイのソントー鉱山に確定することができました。また、中国、韓国の調査では宋銭、永楽銭などの新研究がなされました。シリーズ③はこれらの研究成果を基に大航海時代の日本をめぐる金属交易の問題を論じる内容になりました。私は、この本の中では、原点に戻り、日本の大航海時代の前提となった日宋貿易、日明貿易における輸入銭の問題からこれまでの中世貨幣論の再検討することを提案しました。大量に輸入された宋銭がなぜインフレーションを引き起こさずに機能したのだろうか、室町期以降に使用された永楽銭は本当に輸入銭なのだろうか。というようなこれまでの貨幣論の常識の再検討を迫る論を組み立てました。

以上のことから、別府大学で行われた領域の壁を越えた一連の融合研究は、これまでの研究の常識を打ち破り新たな地平を切り開けると確信しています。今後もこのシリーズを継続し、別府大学から革新的研究を発信して行きたいと考えています。

著者紹介

飯沼 賢司 (IINUMA Kenji)

別府大学文学部史学・文化財学科教授